

第二期 第一一〇号 (初版) (無料)

音信不通

本のピオトップ

学びあう人々のために

2025. 09. 10 定有堂書店 発行

読書の身の丈 (スケール)

えっ、なぜ今、権藤成卿？

ヴォイス

感謝を込めて

弾丸！チベット旅行記！

消費の夏、日本の夏

日々是雑言 (ぞつごん) 8

暑い記憶日記

New World Order

本を作る側から (30)

内坪井町日記 (16)

論語について (4)

終の作家

夏二題

旅立つ前の「宿題」

夏のいきものがかり

エビ編

奈良 敏行

岩田 直樹

松田 裕史

白井 明大

板野 円香

おぎはらさえ

萩原 俊郎

鳥居 貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

齊藤 仁昭

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロミ

三浦 永理

あきの素生

読書の身の丈 (スケール)

奈良 敏行

(定有堂 主人)

米子市のコンベンションホールで第三十回鳥取県図書館大会があり、その第三分科会に、「大人の読書」を課題として、三砂慶明さんと対談形式で参加した(二〇二五、八、十八)。

○ミメーシス・ツインズ

三砂さんは『町の本屋という物語』『本屋のパンセ』を作ってくれたので、二人で一つのテーマを語る機会が多い。この二人の協業の意味をはつきりと知ってもらうために、ミメーシス・ツインズという言葉を用意した。二人で考える人たち、さらに踏み込んで模倣し合い共鳴する二人という意味だ。観念の響きあい成功すれば、そこには二人以上の成果を生み出すことができる。

二人の出会いを知ってもらうために、アール・ブリュットという言葉も用いた。既存の表現に属しない人間(奈良)をキュレーター(三砂さん)が発掘し、世の中にその理解を広める。アウトサイダー・アートなどがそうだ。狭隘だが「一人だけの発見」が所を得る場合がある。

○読書に結論はいらない

子どもの読書には人格の形成・構築という課題がある。大人の読書は生成変化・再構成だろう。

子どもと大人と区別するよりも、読書には二つの階梯があるといった方がいい。まず自己を形成して「一」になる。次はそれを解体し自己を変容する。「わかる」よりも「わからぬ」を抱え込む力量を持つ。同意できなくても、「なぜこのように考えるのか？」を考える力を養う。情報を正しく受信することだけでなく、それを自分が何か別の存在へと変わるきっかけとする。本の意味を掘り下げるだけでなく、本を素材としてあらたな概念を見出す。他人の思想をたたく理解し受容するだけでなく、それを自分の思考を活性化するための触媒として活用する。みんな「一」から先の世界だ。

○人間には他者が必要

対象の一部しか同時に見ることができないが、私たちは対象の全体を考えることができる。それは他者と空間を共有しているからだ。同様に私たちは一つの人生を生きていることしかできないが、書物を体験することによって自己を拡大できる。他者を必要とする確信に基づく読書、それは「一」から先の読書だ。

○「千年の読書」

三砂慶明さんは『千年の読書』の中で、「私は本に人生を何度も助けられてきました」と語る。

《何でも知りたい。知ってどうするのかという細かい疑問は気にとめず、ただただ知りたい。私たちの知りたいことに終わりはありません。》p.20

二人の対談で、これは「フロア体験」のことではないかと一致した。ミハイ・チクセントミハイの概念だ。一つの活動に完全に注意が向いていると他のことが気にならない。集中と没頭だ。外的な報酬は問題でなく、やっていること自体が楽しい。

人はときに道を見失い精神が断片化する。我を失う。しかし読書は「我にかえる」ことを手助けしてくれる。これが三砂さんの発見だ。

○読書の身の丈（スケール）

読書の果てに出会う言葉はなんだろう。わたしは「疑團」だった。疑問、疑惑は解決を求め、疑團は問いが足踏みしている固まりだ。ある日わたしたちは「解けない問い」に向かっていると気づく。疑團は心の中にわだかまっている疑いだが、人間には解けない謎があるのだと人生の下り坂で知る。本を読み続けてきたが、結局答えは出ない。しかし誰でもが同じように物事を見、そして考えているということに気づく。謎は解けないが疑團氷解のときがくる。

水解とは答えが見つかることではない、答えを必要としなくなることである。わからないことにも尊さがあると知る。読書はそのように、いつまでも疑問を踏み分けて歩み続けることなのかもしれない。

○読書のトライアングル

読書は楽しい。それだけでいいのではないだろうか。できればそのようにひたすら確信する人たちの中で生きつづけることが望ましい。読書のトライアングル、それは焚き火のようだと何度も語ってきた。「本」と「人」と「本屋」、この三つのトライアングルだ。この共振の中で、本を読んだり、本を人に贈ったり、本を蒐集して自分の城を築いたり、本に出合うだけでなく他者に出会いそこにアクションも生まれる。読書会とかミニコミを作ったりすることもできる。読む、書く、語る、これが読書のトライアングルだ。この中心に焚き火がゆらめく。

○桎梏と毀損

わたしはいま、図書館大会をふり返って、鳥取県立図書館の二階フリースペースでこの文章を書いている。人はいろんな生き方を選ぶことができる。人生の暮れ方にわたしは「本を読む」ということに賭け札を張った。本と共に生きることに、なにかしら良いものがあると信じるからだ。過去の人生には想いと釣り合う行為がなかなか見出せ

なかった。その相剋を「桎梏と毀損」という言葉で語った。人生の活動範囲が狭くなるにつれ、本を読むという事に札を張った人と出会うことも多くなった。図書館のこの場所もそんな人たちの気配に包まれた稀有な大切な空間だ。

2025. 8. 20

奈良敏行十三砂慶明 『町の本屋という物語』 作品社

2024

奈良敏行十三砂慶明 『本屋のパンセ』 作品社 2025

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

ミハイ・チクセントミハイ・大森弘 『フロー体験入門』

世界思想社 2010



えつ、なぜ今、権藤成卿？——「社稷」をめぐる

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

七月下旬に行われた参議院議員選挙で、某党の演説会場に「八紘一宇」と印字された服を着用した応援部隊がいたようだ。「八紘一宇 某党」でウェブ検索すると、公式ホームページ上の「議員ブログ」の中に「国柄」(一時期よく耳にした言葉)、「国家アイデンティティー」の文脈で「八紘一宇」が語られている。敗(終)戦から八〇年、この語は「界限」で語られ続けてきた。選挙で登場してもさほど驚くほどのことではない。

七月上旬だったろうか、奈良さんから一冊の本を紹介された。内田樹『日本型コミュニケーションの擁護と顕彰 権藤成卿の人と思想』(K&Kプレス、二〇二五年四月刊)。早速、アマゾンで取り寄せる。本稿を書いている八月一二日現在の売れ筋ランキングは二三五三〇位だから、思想書としてはよく売れている。

共著を含めて一〇〇冊以上の著作がある内田の本は、三冊しか読むことがない。『ための倫理学』(二〇〇一年、デビュー作、「読む会」の本)、『レヴィナスと愛

の現象学』(同年、第二作)、『寝ながら学べる構造主義』(二〇〇二年、第四作)。

私の認識では内田はレヴィナス学者である。それなのに戦前の農本主義者を「擁護」し「顕彰」するとは。本の帯には「私は、どうして日本の極右思想に惹かれるのか。三島由紀夫からの宿題を本書で果たせたとと思う。」とある。そこには私の知らない内田がいる。

ここでは『擁護と顕彰』を論じないことにする。浅学非才な私が軽々しく論評できる内容ではないからだ。

権藤成卿(一九六八—一九三七)は懐かしい名である。一九八〇年代半ばから数年かけて、総力戦体制下における科学と思想について調べていた。橋田邦彦に出会ったのはそのときである。時代の思想動向を知るために多くの本を読んだが、なかでも随分と勉強になったのが小林英夫『昭和ファシストの群像』(校倉書房、一九八四年、同姓同名のソシユール学者とはもちろん別人)であった。この本の中で最も印象的だったのが権藤である。

小林はファシストを三つに分類し、それぞれの代表的人物について詳しく論じる。新体制構築派(北一輝、石原莞爾、田中智子)、現状破壊派(井上日召、橘孝三郎、権藤成卿)、権威主義的テクノクラート派(岸信介)。

「君側の奸」排除を目的とした、井上による血盟団事件（一人一殺）と橘の率いた愛郷塾が深く関与した五・一五事件。井上や橘と同列に扱われる権藤は何者なのか。小林は、新体制派の黒幕が北一輝だとすれば現状破壊派の黒幕は権藤であると断じる（一九六頁）。

戦前の思想史をかじったことのある人なら、権藤成卿と言えば即座に「社稷」を思い浮かべるだろう。「社」＝「地を神とする所以の道」＝「大地」、「稷」＝「五穀の長、粟」＝「食物」である。「土ありて而る後民人あり、民人ありて而る後君長あり」、すなわち社稷を体現した共同体が国家に代わらなければならない。

内田は渡辺京二に従って社稷思想を「日本型コミュニン主義」と規定する。権藤は大化の改新を社稷が実現された理想社会と見做す。明治維新以降、西洋崇拜思想の蔓延によって社稷（東洋的自治）の伝統と歴史は消えつつある。一九二〇年代末、金融恐慌、昭和恐慌に起因する民衆の悲惨な社会状況の下、社稷思想は農民、青年将校、学生たちの心と共鳴して支持者を増やしていく。

今でも鮮明に思い出すのが、教育思想史のゼミである。朝日新聞の文化欄に農本主義、社稷思想についての論考が掲載され、ゼミで話題になっていた。私は指導教官のH教授に軽率にも「地方出身者にとっては社稷って懐かしい

感じがしますね」と言ってしまった。その瞬間、いつも濃厚な先生の顔色がさっと変わり、「君は社稷概念がどんな悲劇をもたらしたのか知っているのか」とおっしゃった。私の勝手な想像に過ぎないが、父が職業軍人だった先生はバリバリの軍国少年であり、悔恨の念から戦後社会に相応しい新たな教育理論を打ち立てようとされていたのではなかったか。

紙幅が尽きた。最後にひとつ豆知識を。

権藤の弟子の一人に、智頭生れの人物がいる。その名は伊福部隆彦（隆輝、一八九八—一九六八）。古代豪族の末裔である伊福部氏は因幡国一の宮の神職を長く務めた名家で、作曲家の伊福部昭は本家筋、隆彦は傍流の出である。生田長江に師事した隆彦はアナキズムから東洋的農民自治思想に傾倒していき、やがて権藤の門下に入る。晩年には、皇室の歴史は老子の理想を体現しているとする「老子伊福部教」（国家社会主義者・津久井龍雄の命名）を唱える（片山杜秀『近代日本の右翼思想』講談社選書メチエ、二〇〇七年、一四七頁以下）。

レヴィナスの「顔」の倫理学、権藤の「君民一体の心情」に基づく「コミュニン主義（コミュニニズム）」。「接点はどこに存在するのだろうか。」

ヴォイス

松田 裕史

(高校教員)

かつては研修と言えば、対面研修のことだったが、今ではオンライン研修の数が対面を上回っているのかもしれない。興味をそそられるオンライン研修が同日に複数開催されることも珍しくない。

昨年のある日も、参加したい研修が三つも重なることがあった。そのうち二つはオンラインでの研修で英語教育に関わるものであり、もう一つは国語教育に関わる対面での研修だった。結局、二つのオンライン研修をお断りし、資料だけをいただくことにして、専門でもない国語教育のセミナーに参加することにした。

「国語授業づくり改革セミナー」では北海道から堀裕嗣先生、山下幸先生、宇野弘恵先生がいらっしやり、御講演や模擬授業をしていただく内容である。お三方は全国的にも有名な現役教師であり、特に、堀先生の著作を僕は何冊も読んでいたのでこのセミナーは楽しみにしていたのだ。堀先生

は日本の全校種、全科目の教員の中で最も著作の多い先生ではないかと思う。中学校の現役教師でありながら、著作が五〇冊以上あるのは信じがたい。しかも、それぞれの著作には優れた実践知が余すところなく、理論的に整理された形で紹介されており、何年たっても色褪せない。英語教育の中で「読むこと」をどうすればいいのかが、長年悩み続けているが、堀先生の国語教育に関する著作にはヒントが詰まっている。国語教育のみならず、道徳教育、一斉授業、アクティブラーニング、仕事術など著作のテーマは多岐に渡る。とはいえ、高校の英語教員が参加するのは異例のことであろうし、実際の参加者はほとんどが小学校教員であった。僕が高校英語教員であることが知れると、会場がどよめく場面もあった。

セミナーの冒頭は、鳥取県の三人の小学校教員による模擬授業から始まった。それぞれ持ち時間は一五分である。わざわざ休日にも模擬授業をしようという心意気には感心していたが、模擬授業後の堀先生、山下先生、宇野先生による授業後の講評はそんな心意気はたやすく蹂躪されるような、辛辣なものであった。いや、授業後の協議は本来、そうでなければならぬ。当たり障りのない感想を言い合って褒めたたえても授業者には有益ではない。「教材に目を向けさせていない」「内容のなぞり、確認で終わっている」「表層的

な読みしかしていないのに自己表現に向かわせてはいけな
い」などのコメントはまるで僕に向けられているかのよう
にも感じた。辛辣ではあるが奥底には授業者に対する愛情が
隠されている講評であった。授業を観る視点の鋭さ、分析力
の高さに全国トップの教師力の一端を感じたが、それは序
章に過ぎなかった。その後の三人による講座、模擬授業は圧
巻の内容だった。

宇野先生は、「ことば」は思考・理解・判断・表現・認識だと
断言された。そして、ことばへのこだわりを醸成することが
人間性につながり、醸成を実現するのが教師の使命だと
も。この当たり前の事実をしかし、他人に向かって言い切れ
る教員などほとんどいないだろう。

多くの人が学習したことのある「スーホの白い馬」を扱っ
た講座では、なぜスーホは馬の死の直後、馬頭琴を作ったの
か？という問いが主発問だった。それに対する宇野先生の
解釈は実に鮮やかであり、参加者から、解釈のテクニク、
方法論などがありますか？、という質問が出た。宇野先生
は、「ない」と即答された。それは、効率やマニュアルをすぐ
に求めようとする心性に対する諫めでもあったと思う。堀
先生は講座で、長田弘の「世界はうつくしい」という詩と、
石垣りんの「挨拶」という詩を扱われた。僕はどちらの詩人
も好きだったので二つの詩は読んだことがある。ところが、

二つの詩でキーワードとなっている「美しい」が、どのように
違うのが答えられず、混乱した。確かに違うことだけは感
覚的に分かる。分かるが言語化できない。そこに、協働的に
学ぶ意義が生まれる。米倉斉加年の「大人になれなかった弟
たち……」も講座の教材として扱われた。堀先生はまず、本
文六ページを範読された。内容が聞いている人に沁みこむ
ようなトーン、速さ、間の取り方……。リアルな範読に圧倒さ
れる経験はいつ以来だろうか。高校の国語や英語の授業で
範読を聞いたことがないし、自分もやっていない。範読がで
きる教員になることが今の一つの目標である。

生成AIの時代に、あらためて「ことば」とどう向き合う
かを考えさせられる。考えることを止めないように、考えて
みる。自分の身体から生み出される言葉は、声は、ヴォイス
はどこからどこへ行くこととしているのか。大澤真幸は『生成
AI時代の言語論』において、人間の言語使用における中動
態的経験を説いている。「私の中にはもともとない、外(他
者)からやってきた言葉が、しかし、私の内的な真実を言い
当てていると納得したときの眩暈がするような感覚が、歓
びをもたらしている。「みずからの声を取り戻すこと、ヴォ
イスを届けようとする」こと、このことに向き合うために励
ましをいただいたセミナーだった。

感謝を込めて

白井 明大

(詩人)

今回の『ヘリヤ記Ⅱ』展で、鳥取や浜坂の方々にも多大なるご尽力をいただいた。この場をお借りし、作家・出演者の紹介文を再掲したい。心より感謝を込めて。

伊民公恵 Kimie Itami

昨秋の『ヘリヤ記』展ギャラリートークで伊民さんは拙詩「生きる」を朗読してくださいました。ちょうど十年前に上梓した第五詩集『生きようつと生きるほうへ』に収めた詩です。詩を読む声に耳をかたむけながら、伊民さんの凛とした清々しさは生き方そのものの表われであることをひしひしと感じていました。詩の言葉を受けとり響かせる純粋な声をお持ちの方です。

キノシタヒロシ Hiroshi Kinoshita

もしかしたら建築家の目に映る街や都市とは、現実の光景

と、そして可能性としての姿とがあるのではないのでしょうか。Ⅱ巻作中の庁舎に具体像を与えたキノシタさんのエスキースに、ファンタジーが探求する未来の可能性と通じるものを感じ、未知をかたちにする建築家の仕事の一端を垣間見る思いがします。

佐々木友輔 Yusuke Sasaki

沖繩を舞台にした映画『TRAILER』の那覇での上映会が佐々木さんとの最初の出会いでした。読谷から南部へと自転車をごきながらカメラで撮影した映像が目には焼き付いています。風景論も、鳥取県内の映画館等に関する取り組みも、佐々木さんの生み出すものからは、表現における誠実さとは何かという問いを感じます。それが身体の重みを伴う問いであることも見逃せません。

奈良敏行 Toshiyuki Nara

私が鳥取に移住することをきめた理由のひとつに、定有堂書店という素晴らしい本屋があると教わったことがありました。知とは、本を好きな気持ちや、読むことを深く楽しむことから積み上げられるものなのだ、定有堂に足を運ぶにつれ充実する自分の本棚を通して実感されました。本をこよなく愛する奈良さんとお話できることは、得難いよ

ろくびに感じます。

芙植物室 Fu shokubutsu shitsu

植物がもつ生命力を大事に、人間の手が加わることを最小限に留めながら、折々の植物を人の許に届けようという芙植物室の七理由芙さんの姿勢を知ったとき、目からうろこが落ちる思いがしました。ヘリヤという架空の世界の植生を再現するのではなく、植物と人間との関わりへの物語的な問いかけを、会場の植物から感じていただけたら幸いです。

前田環奈 Kanna Maeta

もとはソーダ水の工場だったという古書店、邯鄲堂に足を踏み入れた瞬間、『はてしない物語』冒頭のシーンを想起させられました。本のために生まれかわった空間に、名著の数々が息づく気配が伝わってきました。多摩美術大学で油画を専攻し、鳥取民藝美術館の学芸員を務めた足跡がそのまま邯鄲堂へとびている、そんな前田さんの絵も言葉も心に深くしみてきます。

森の生活者 Mori no Seikatsusha

ノルという架空の穀物は、思いがけず象徴的な存在になりました。ヘリヤの自然環境で育つ植物を考えたとき、思い浮

かんだのは鳥取砂丘で目にした背の低い、房のある草でした。そんなノルをイメージして森の生活者の森木陽子さんが焼いてくれたクッキーは、物語の中にしかない未知の味を届けてくれました。

また展覽会場のBGMは前回に続き、ボルゾイレコードの前垣克明さんに素晴らしい曲を選んでいただいた。LONDON IS THE PLACE FOR ME! (Trinidadian Calypso in London, 1950-1956) / Martin Denny [EXOTICA] / The Beach Boys [FRIENDS] / Cyrus Faryar [ISLANDS] / Caetano Veloso [white album] / Hermeto Pascoal [SLAVES MASS]。

最後に『ヘリヤ記 II』冒頭の舞台のモデルとなった沖縄・斎場御嶽の写真を、告知用のリーフレットやポスターに提供してくれた写真家、妻の當麻妙に感謝を。

弾丸！チベット旅行記！

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)



ハタハタと乾いた音を立てながら、色とりどりのタルチョが風になびいている。風に揺れながら、しかし大地に根を張るように並ぶ布。誰かの祈りが、存在そのものの姿に変わる光景を、私はずっと夢見ていた。今、それを目の前にしているのだ。

*

八月七日(木)、定有堂教室、読書室「ヒオトープ」の後、皆が寝静まる夜の街を、私は関西方面に向け車を走らせていた。翌朝に控えたフライトに間に合わせるためだ。その週末、私は2泊3日の弾丸チベット旅行を企てていたのだ。(※今回の記事は、写真と伴にお送りします。文頭のQRコードを読み取り御覧ください)

旅の動機は単純だった。いつか写真で見たチベット仏教のタルチョ——祈禱旗の連なる姿に心惹かれたのである。その光景は月日が経っても色あせず、私の心に残り続けた。そのうちに「いつか直接目に見てみたい」、そう思うようになっ

いた。——行くか、チベット。

真つ先に浮かんだのがチベット自治区。しかし、政治的、情報統制の理由等でコーディネーターを雇わないと外国人は入国出来ない規則となっている。雇う金がない。

加えて困難や不便さも全て受け入れ、自ら道を開拓してこそ、真のバックパッカーと言えるよう。トラブル？ 野宿？ どんどこい、である。話はそれだが、そうして決まった旅先は、インド北部にあるラダック地方、その中の「レー」という町であった。インドに位置しながらチベット文化が今も色濃く根付く土地。いまだ少数民族が生活し、開拓し切れていないダウンホームな魅力が存在する。

デリー空港で国内便に乗り換え、レーへと向かう。一時間少しのフライトであったが、厚い雲を抜けた途端、窓から見える景色は一瞬にして変わった。低彩度で渓谷の深い山々、八月だというのに一部の山頂にはまだ雪が残っている(1)。
まさに異邦。夢見た景色がこの中に在る。

飛行機を降りた時、肺に送り込む酸素の量が明らかに足りないのが分かった。指先がチリチリし、事前に飲んでいたダイアモックス(疑似的にアシドシスを起こし、呼吸数を増やす薬)が効いているのが分かる。高地順応なしに3,500mに挑むのだ。高山病で丸一日寝込むのもやむを得まい——結局、滞在期間中、高山病らしき症状は気配すらな

かつたのだが……。

一泊二千円とは思えないくらい、フアブリックが可愛い宿にチェックインし《2》、メインバザールへと向かう。通りを行き交うのは、チベット民の他に、インド系の住民たち《3》。ときおりオレンジ色の法衣をまとった僧侶たちともすれ違ふ。「ジュレー」、この土地での挨拶だ。「おはよう」「もこんにちは」「もきゃよなら」の意も含む。お土産物屋にはストールやポンチョといった織物の他、仏具や仏画なんかも並んでいた《4》。円環的で中心性をもった祈りの形。マニ車という仏具には、中にロール状のマントラが納められており、これを時計回りに回すことで、経文を唱えるのと同等の功德が得られるとされる《5》。山々の環に囲まれた町で、商人たちの呼び声の中、マニ車の音が静かに響く。大小様々な円環がこの一帯を覆っている。

カレーという概念がないほど無差別にカレー味なインドと異なり、チベット料理は存外私の口にあった。「トウクパ」という料理は白湯スープに味噌を混ぜた様な味で、麺は歯が無くても食べられるほどフヤフヤだった《6》。なんせ沸点が高いのだ、彼らはアルデンテを知らない。

翌日、旅の目的であるタルチョがある寺院を訪れた。車で山道进行すること数十分、それは急に目の前に現れた。

ハタハタと乾いた音を立てながら、青・白・赤・緑・黄の五色

の布に印された経文が、山の稜線や峠に連なり、風に叩かれるように震えている《7》。地面から湧き出たような鮮やかな旗とは対照的に、遠くにあるモノは古くから在るためか、端はほつれ、印されたマントラも読めないほど褪せている。その消滅と持続が同時に進行する姿に、私はしばらく立ち尽くした。

タルチョはマントラを布と文字に託すことで、「祈りの物理的な可視化」を実現している。しかし、それは建築物や彫像のように永続するものではない。風にさらされ、祈りは飛んで広がり、そして朽ちてなくなっていく。この連鎖と空白に、吉野弘の詩『生命は』の一節を思い出した。

生命は／自分自身だけでは完結できないように／

つくられているらしい／(中略)その中に欠如を抱き／

それを他者から満たしてもらおうのだ

タルチョは祈りを形式化したものである。しかし祈りは布から離れ、風に運ばれることで、当初とは別の存在様式を持ちはじめた。布は朽ちて文字は消えゆくが、その途上こそ祈りの完成形であるのだろう。消えながら続く、その独立した姿に、私は生命と同じリズムを感じた。今も私の記憶の中で、うねり、形を変えながら拍動している。

消費の夏、日本の夏

おぎはら きえ (蔭山)

また生活必需品が増えてしまった。遺憾だ。

ミニマリストという言葉が普及して久しい。SNSなどでその暮らしぶりを垣間見ることができるとは、モノが極端に少ない部屋で身軽そうに暮らしている姿には憧れを抱く。そういうテーマの本も数多出版されていて、なかなか片付けが身につかない私は定期的に読み返して心を引き締め直している。

ゆるりまいのコミックエッセイ『わたしのウチには、なんにもない』(KADOKAWA)は衝撃的だった。本書に著者宅のリビングの写真が載っているが、そこに写っているのがダイニングテーブル、椅子、テレビ、座椅子、以上。観葉植物など装飾的なもの、ティッシュ、何か小物を入れておくような箱、そんなもの一切ない。夫、母、祖母の大人四人暮らしにも関わらず生活感が無い。ティッシュやテレビのリモコンなどは棚にしまっているらしい。撮影のためではなく、普段からしまっているとのこと、著者にとつては都度取り出す面倒臭さより視界に細々したものが入る苛立ちの方が不快なのだそう。風呂上がりに身体を拭くのは

バスタオルではなくフェイスタオル二枚。バスタオルより嵩張らず乾きやすく良いらしい。このようにあつて当たり前の日用品でも減らせれないか縮小できないか考えながらも家族の気持ちも疎かにせずちゃんと相談する様子が紹介されている。

稲垣えみ子の『寂しい生活』(東洋経済新報社)には常識が打ち壊された。炊飯器をやめて土鍋で米を炊く、掃除機をやめてほうきで掃除をする、くらいは他でも聞か、冷蔵庫を手放したというのには驚いた。だからと言って著者は食事を外食やインスタント食品で済ませているわけではなく「干す」「漬ける」を駆使して野菜を保存し、自炊をする。当然冷蔵庫がないことで買い溜めはできなくなる。それは一週間先のことまで考えるのではなく「今ここ」に集中することに他ならない、と禅のような悟りを開く。自分の腹を満たすための冷蔵庫が、時間や可能性、不安に縛られる装置になっていないかという指摘は目から鱗だった。二人がこのような境地に至ったきっかけは共通している。東日本大震災だ。ゆるりさんは仙台に住んでいて、元々はモノが多い家だったが、地震の際に崩れた大量のモノの山に必需品を取り出すこともできず苦労されたそう。その反動でモノを持たない暮らしを追求するようになった。稲垣さんは震災当時は朝日新聞の記者で神戸市に住んでい

だが、原発事故をきっかけに電気代半減を目標に節電に励んだ。

持ち物を少なくすると、身体がとつても軽くなったような感じがして快感！（ゆるり）

何か手放せるものがないか絶えず探している。（稲垣）

このような本を読んで私も捨てること、手放すことに精を出していた時期がある。何かに使えそうと取っておいた空き瓶とか紙袋とか、そういうものを捨てるところからはじめ、二十枚近くあったハンカチは洗濯の頻度などを考えるところと半分以下の枚数で十分足りることに気がつき捨てた。掃除に使う洗剤は用途で使い分けず、床も風呂も窓もウタマロクリナー一本にした。着る服に悩む時間を減らすため仕事着は同じシャツを買い、着こなしパターンを決めてしまった。本は本当に好きで読み返したい作品だけ手元に置いてあとは売った。床に積んでいた本が無くなり、本棚にすべて収まってすっきりした。

モノが少ないと掃除がしやすい。いちいちモノを移動させなくてもハンディモップや掃除機をザツとかけられるのは気持ちがいい。モノが少ないと管理がしやすい。探す時
間、悩む時間がなくなる。

しかし、まず後悔したのは本を売ったことだった。手放した本に限って再評価されて話題になったり、突如思い出

して無性に読みたくなったり。結局買い直した本もある。本だけは対象外にしよう、他で頑張ろうと思ったが、服についても同じコーディネートに飽きて仕事に行く意欲も落ちた。

で、本当は減らしたいのに増えてしまった私の新たな生活必需品に話は戻る。新たな生活必需品 それは、汗拭きシートだ。

夏の蒸し暑い夜を越した朝、汗でべとついた身体をスッキリさせたくて試しに買って見たのが五年ほど前。まだそのころは毎朝使っていたわけではないと思う。シートが無くなっても「今度ドラッグストアに行つたときでいいや」と余裕があった。しかし今年梅雨が早々に明け、連日、朝からクーラーを点けたくなるほど暑い。汗で身体にはりついたTシャツを脱いで汗拭きシートで身体を拭くとすーっとしてひと心地着く。これがないと着替えられたものじゃない、とすっかり依存している。毎朝使つて、シートが入っている袋が薄くなつてくるとハラハラする。切らしてはいけない、と焦りを感じる。近年十月に入つてもまだ半袖を着ているが、今年は一休いつまで汗拭きシートを使うことになるのだろうか。

日々是雜言（ぞうごん） 8

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

クリスチャンの系譜

クリスチャン宰相、石破茂の母方の曾祖父が、新島襄（同志社大の創立者）の愛弟子で明治初期、日本基督教団の立ち上げに加わった金森通倫（1857—1945）であることは有名になったが、金森の生涯を調べたら、私の曾祖父や祖父と思わぬ接点が浮かんできて、驚いた。

萩原の家系はどうやら「隠れキリシタン」だったらしく、行商人をしながら流れ流れて岡山県の西端にある港町、笠岡にたどり着き、曾祖父は笠岡基督教会の「堂守」をして家族を養っていたという。その次男である祖父も救世軍や「日曜学校」の校長をしていたので、幼い頃、祖父母に預けられた私は毎週日曜の朝、同教会に通っていた。

笠岡基督教会は1884（明治17）年設立の岡山県内でも屈指の古い教会で、その設立式と第1回洗礼式の記録には「金森通倫牧師が司式を行った」とあるから、そこで金森が私の曾祖父と会ったのはまず間違いない。

さらに奇遇は続く。金森が初代牧師を務めた岡山基督教会には、父方とは違って裕福な家に育ち、銀行員をしていた母方の祖父がいた。晩年、金森は渡米して伝道活動に力を入れたが、母によると祖父は、若い頃、銀行を辞めてアメリカで伝道師になる、と言って周りを困らせた」というから、こちらも金森の影響があったに違いない。

不戦の誓い

英語がたんに能で、オペラやマンドリン、スキーを楽しむ「モボリモダンボーイ」だった母方の祖父は、クリスチャンがゆえに四十を過ぎて兵隊にとられ、復員後、結核で亡くなった。家は没落し、幼い弟妹を養うため、母は大学の授業料が免除される教員の道を目指した。

一方、父方の祖父は貧乏だったものの先見の明があり、戦前、笠岡で今のヤクルトのような乳酸菌飲料の会社を起業したが、これもクリスチャンゆえの迫害か、戦時統制で全てを失った。極貧の中、旧制高校から東大仏文科に進み作家

を夢みた父も、一家を養うために在学中に岡山に戻り、地元
の新聞社で働かざるを得なかった。

そんな父と母は、YMCA(クリスチャンの青年団体)の集
まりで出会い、やがて私が生まれた。

父は学生時代、洗礼を受けていたが、新聞社の組合活動
を通じてコミュニストに転じた。当時、そういう大学出の若
者は少なくなかった

なぜなのか、生前聞いたことがある。即座に「2度と戦争
を起こさせないためだ」と答えた。昭和6年生まれの父は、
もう少し戦争が長引けば学徒動員されていた。父方も母方
も、戦争は全てを奪っていった。

石破首相の父(石破二郎元鳥取県知事、元自治相)はクリ
スチャンでなく浄土宗の信徒だが、石破は「敗戦と言わない
で終戦などと言うから事の本質を見失うんだ」と怒って
いた「父は根っからの反戦主義者」と回想している。戦前から
優秀な内務官僚だった二郎は、評伝を読むと、来日したナ
チストイツの高官の歓迎会に出るのを嫌がるくらい「ナチス
嫌い」だった。

戦争を知らない子どもたち

二郎の盟友で、石破首相が師と仰ぐ田中角栄は、満州の

戦線に送られた経験がある。「戦争を知っているやつがいる
うちは日本は安心だ。戦争を知らない世代がこの国の中核
になった時が怖い」という言葉を残している。

なぜ亡くなった安倍晋三元首相が、父方の祖父で、戦前
・戦中に翼賛体制や東条英機と対決した衆院議員、安倍寛で
なく、東条内閣の大臣で戦犯だった母方の祖父、岸信介を
政治家の手本にしたのかは、よく分からない。

ともかく、意識するにせよしないにせよ、私たちはそうし
た折り重なった代々の歴史を自分のDNAの中に秘めて、
日々生きている。それでも戦後80年ともなると、前号で
紹介したような、大東亜共栄圏の侵略のスローガン「八紘一
字」を、「日本が祖先から受け継いだ…世界が一つの家族と
して、平和に暮らす理想」などと言いくるめる政党(参政党)
も出てくる。

これが「音信不通」に載るころ、石破首相がどうなってい
るかは分からない。ただ、歴史を偽造・修正されなかったため
も、彼は父祖の志を受け継ぎ、首相として何らかの「爪あ
と」を残して欲しいと願うばかりである。

暑い記憶日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

朝から「暑い」しか言っていない。このへんでは「こんなに
は」と「暑いねえ」がひとまとまりのあいさつになったよう
だ。向かいに住むフクモトさんちのおじいちゃんが見覧板を
持つてゆっくり道を渡ってくる。「あついなねえ」「どうです
か調子は」「うんうん」聞こえているのか聞こえていないのかわ
からないが何か話したそうなのでちょっと待つてみる。

「子どもたちだね、話をする時間はないかなあ」と思い出し
たように言う。話。なんの話だろう。「昔はね、橋の強度計算
なんかをしてたんですよ。」大学の先生をしていたフクモト
さんは瀬戸大橋の設計に関わっていたらしい。その話はもう
十回くらい聞いた。「子どもたちは橋の話は興味ないかな
あ。」「ちよっと叙しそくにフクモトさんはつぶやく。子どもた
ちに話をしたい、というのは今日はじめて聞いた。「昔のこ

ら辺はどんなやつたんですか」「そうねえ、中学生の時にね、
疎開をしましてね「疎開ですか」「アメリカの飛行機が爆弾
を落とすにくるって言うんで、和歌山に疎開したんですよ。
当時は松原のね、四条通の向こうの中学校に通っていたんや
けど」「父親が和歌山の出でね。田舎にいけって言うんで行っ
たんですねえ。ややこしい時代やったなあ。」「ややこしい時
代、のところだけが妙に耳に残る。今はややこしい時代では
なくなつたんですか、と聞こえかと思つたがやめておいた。

話は続く。「リヤカーを引いていきましたねえ。荷物を積
んで、何日もかけてね。大阪の一番南の、山があるでしょ
う？ その山を越えたところ、和歌山が田舎なんですわねえ。
そんなところまで歩いていきましたねえ。うん。」強い日差
しの下でフクモトさんは話し続けている。立つている身体の
角度がどうしてもまっすぐとは思えない。

フクモトさんはいつも靴下をつけた足に無理やり草履をは
いていた。ただでさえ転びそうな足取りなのに、靴下に鼻緒
が食い込んだ草履はあぶなっかしくて見ていられない。今日
の足元は別のつつかけをはいている。新しく買ったのだろう
か。それでもやっぱり足元は不安定だ。ちよっと日陰に入り
ましようかと声をかけ、うちの前にあるベンチを陰に持つて

いく。「あっ」とフクモトさんが声をあげる。一匹のゴキブリが目目の堀をのんびりはっていた。フクモトさんは当たり前のように素手でゴキブリをはらう。ちよつとびっくりするような素早い動き。「あああ、あなたの家のほうに行つたよー。」道路を渡つていくゴキブリを木陰から二人でしばらく眺める。

「堀川の商店街なんかはどんなだったんですか」「ああ、賑わつてましたねえ。小学生の頃にね、進駐軍なんかもきてお店が並んでね。」終戦は小学生で迎えたのか、中学生で疎開したのか、このへん記憶の時系列が曖昧なのかもしれない。

今年で九十二、三歳になるといふひとにとって、数年の違いはもう違いのうちにはいらぬのかもしれない。「本屋なんかもあったんですか」「うーん。戦争が終わつてすぐの頃は、みんな食べべものことで精一杯やつたねえ。お惣菜やら野菜やらを買つてきてね」「堀川通の両側、向かい合わせに魚屋さんが何軒ありましたよ。今でもありますねえ」「本や文房具なんかは、そうねえ。どうしてたんならなあ。」

「あー!ここにいたんですか!」バタバタと家の中からヘルパーさんがでてきた。「みんなで探してたんですよー!」「はーはい」「フクモトさんは家の中へ戻っていった。日差しの中に取

り残される。話はそこで終わってしまった。

ながいながい記憶の中の、数年間のややこしい時代。本や文房具よりも食べ物で精一杯だった時代。暑すぎる日差しの下で聞いた、遠い記憶。記憶の中の夏も、こんなふうに暑かつたんだろうか。今度はそれを聞いてみようと思つている。

開風社

〒602-8125 京都市上京区大宮通榎木町上る菱屋町8

1-8

080-3166-1385

info@kaifusha-books.com

http://www.kaifusha-books.com

New World Order

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

一、二週間に一度は県立図書館に行くようにしている。目的はいくつかあって、まずは新刊のチェックだ。

取次を通して流通している書籍は、書店専用の書誌検索サイトで基本的に全部チェックしているが、それでも漏れがある。

図書館に入るとまず新刊コーナーに行き、全ジャンルをひと通り見る。気になった本は目次とあとがきに目を通して発注する場合はISBNをメモしておく。

それから気になっているテーマやジャンルの棚に行って、何冊かに目を通す。売り場づくりやお客様におすすめるネタ探しが目的だ。

最後に、書架をなんとなく眺めながらフロア全体を歩く。自分の脳をリセットするのが目的だ。もう少し具体的に書くと、「理路整然と並べられた本の群れを見る／感じるため」だ。

店では意図をもって、また時にはあえて文脈を無視して本を並べているが、いずれにしろ自分なりのロジックなの

で、独りよがりになる傾向がある。

一方で図書館では、日本十進分類法という厳格に定められた方法で本を並べている。したがってこの分類法では、同じ著者でも別々の棚に収められたりするのだが、そこに面白さを見出し、自分の恣意性に修正をかける。

自分に課しているルーティンのひとつだ。

*

八月十八日(月)、米子で行われた鳥取県図書館大会の、NPO本の学校が担当する分科会に参加した。

スタツフとしては初めての参加だったので、朝から入り設営なども行う。勝手が分からずボンヤリしているうちに、皆さんがテキパキと準備を進めてあつという間に完了。机と椅子を動かすくらいしかできなかった。

十一時前にメイン会場に移動し、別の分科会に登壇される読書室主宰・三砂さんの物販ブースの準備を手伝う。三砂さんの到着が昼を過ぎるため、それまでのフォローを事前に頼まれていたからだ。

定有堂・奈良さんの本二冊に三砂さんの著書、それから三砂さんのイチオシである作品社の『奪われた集中力』などを、境港図書館の方や小林みちるさんに手伝ってもらいな

がら並べる。

飯田一史さんの基調講演後、参加者が会場から出てくるので、売り場に足を止める方にセールストークをする。

余談だが、こういった著者イベントでの物販では、お店の営業スタイルとは異なり、こちらから積極的に声をかける。今回はあくまでも手伝いなので、自分の店の売上にはならないのに(ー)ついはいりきって売ってしまうのは、書店員としての性(さが)だろう。

*

分科会ではニジノ絵本屋さんの代表であるいしいあやさんをお招きし、話を伺った。

書店や出版社での勤務経験は全くなかったのに、ビルの三階で一坪半の絵本屋を始め、現在は移転して路面店の一号店と、東京ドームの遊園地内に二号店を運営。

そして作家さんとの出会いがきっかけで絵本の製作も開始し、現在四〇点以上を手掛け、海外の賞を受賞したり翻訳される作品も。「パン屋がパンを作って販売するイメージで絵本を作っている」という言葉が新しい本屋像を示しているようで、とても印象的だった。

他にも、絵本と音楽のライブを行うアーティストが所属

していたり、絵本のMVやCM、ウェブデザインを手掛けたりと活動は多岐にわたるが、あくまでも「絵本のおもしろさ」を届けるための手段で、本だけでは儲からないから他のこともやっているのではない、という点にも感銘を受けた。

西部の司書の方とも交流ができたので、まだ行けていない県内の図書館を訪れようと思う。

【参考文献】

『ニジノ絵本屋さんの本』 いしいあや 西日本出版社
とにかくパワフルでアクティブな方。

『本』とともに地域で生きる『南陀楼綾繁 大正大学
南陀楼氏が日本各地の本屋 図書館 ローカルメディアを紹介したルポ。永井さんへのインタビューも掲載

『本売る日々』青山文平 文春文庫
本を行商する本屋が主人公の、時代小説。

定有堂ヒル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (30)

村瀬謙介

(小取舎)

八月は忙しかった。クラウドファンディング、それが終わればその書籍『「見る場所」のメディア考古学』作り。刊行記念トークイベントも日が決まっているのでそれまでに何とか本を間に合わせないといけない。深夜まで作業が続く日々が続き、著者とデザイナー、学生も交え校正・修正を繰り返す。「私、手が空いたので何か買ってきましょうか?」というセリフを久しぶりに聞いた。徹夜作業に買出しはつきもの。だがこの言葉を聞くと、「ありがたいねえ」という思いと、「つてことはまだ終わらないんだよなあ」という絶望に似た思いが入り混じる。

校正についてはいつも私と著書の二人で行われる。著者の知り合いや、私の身内に読んでもらうことはあるが、基本二人であり、修正は私だけにしかできない。だが今回はそもそもデザイナーのノカヌチさんがカラーページを六〇

頁分も作ってくれているので、その修正はノカヌチさんしかできない。校正・校閲をしてくれる編著代表の佐々木友輔氏、カラーページを直せるノカヌチさん、モノクロページを直す私がある。彼はその場に集まり作業した方が早い。とはいえ最近別の仕事もあつて寝てなきすぎて私はハイテンションな気分です。校正しているが、佐々木氏は校正紙をもったままウトウトしている。彼は彼で忙しく他にも仕事があり、もういっぱいいっぱいなのだ。今回徹夜はしていないが、昔フリーペーパー制作の会社時代はこれが毎月だった。「ちよつと一五分寝るから絶対起こしてね!」とか、二七時間テレビで椅子を二つ並べて器用に寝ているスタツフさんのような寝方を習得した。毎月文化祭のようだった。あの時はみんな若かったけどあれから二〇年近くたっているから勝手が違う。

今回はこの本作りに関わっている人が多い上に、最初から小取舎始まって以来のタイトなスケジュールなため、普段は入稿してから二日ほどある色校返却猶予もないに等しく、なんとしてでも印刷まで持つていかなくてはならないのだ。全一九六頁、表紙のページを入れると二〇〇頁になる。しかも今回、字が小さい。いや、そんなことはない。いつもの小取舎の文字ポイントが少し大きく、さらにいう

と、実はこの制作とかぶってもう一冊、三六六頁の本を作って入稿していた。その本が大活字本で二二ポイントの大きい字で作っていたので、今回の字が小さいと思うのだろう。歳のせいではないよな……。

とにかく、トークイベントのある九月七日を発刊日としているのでこの音信不通を皆様が読んでいる頃には書店に並んでいるだろう。

一般流通させる本にはISBNコードというものをつけるのだが、それとは別に書籍JANコードというものを制作時に作る。書籍カバーの裏にある二つのバーコードがそれだ。上は出版社がまとめて取得するコード（ISBN）で、下の方のバーコードが何を表しているかというと、出版国を表す一九二の数字、書籍分類コード、本体価格、その本に割り振られた一桁の数字で構成されている。中の書籍分類コードは奥付にCというアルファベットの次に書かれている四桁の数字と同じである。『「見る場所」のメディア考古学―鳥取から日本映画史を描き重ねる』は「演劇・映画」の分類である〇〇七四の数字を割り振った。四桁の最初は販売対象（〇は一般、次の数字は本の形体（〇は単行本）、三、四桁目で内容を表す。内容を表す分類の中には大雑把

に「社会」だとか、「日本歴史」だとかいう分類もあり、大体どれも当てはまる分類で悩ませてくる。

「演劇・映画」で分類して良いものかと一瞬思った。今回のこの本が映画そのものを主役としていないからである。映画本編については微塵も触れていない。映画館やレンタルビデオショップ店、そしてその遺跡と記憶。映画を作る側から発信される本や雑誌はたくさんあるが、見る側を主役とした本はそうない。渾身の一冊。そして見る場所を見るところというプロジェクトはこれからも多くの人を巻き込んで続いていく。

小取舎の最新刊

『「見る場所」のメディア考古学―鳥取から日本映画史を描き重ねる』佐々木友輔・杵島和泉・Cara 編著

本体二七〇〇円 発行 2025.9



内坪井町日記（16）

齊藤 仁昭

（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

八月二日

下北沢BASEMENTBARにてケバブジョンソンのライブ。イラストレーターかつ会場のブックング担当の24歳だという女性による企画で、お客さんが百人ばかりいらした。

若いお客さんが多く、完全にアウェイの空気に包まれる。若い対バンの方々の方が演奏が大人だし、お客さんの趣味もよきそうだからなんだかもぞもぞしたが、しっかりと演奏する。拍手が小さいような気がしたが、気にすまい。

対バンのフードウーユーラブがとてもよかった。うつくしいロックンロール。ドラムの方はピースもやってるそう。さもありなんという素晴らしい演奏。また一緒にしたい。

八月七日

下北沢LIVEHUSにてライブ。会場の5周年記念イベント。この日は店長が所属する大所帯バンドthe i i d placeの演奏が圧巻だった。とても熱くて、言葉とサウンドが等価で同居するようなライブ。現代的なテーマをきちんと音楽に落とし込める力に感動した。こんなことができんだ。どこかで僕があきらめてたというか、できないと思いついてしまっていた音楽の在り方というか。杉浦も感動していたみたい。店長に素晴らしいかったですといながら、感極まって手を握ってしまった。

終演後、橋本とともに佐藤家へ泊ってもらいに向かう。江古田の名店・太陽ラーメンでつまみとビールで軽い打ち上げ。最後はラーメンまで食べて満腹に。熊本では友人と飲んだりしないので寛いでしまう。

翌朝は真面目に練習、佐藤君は仕事で欠席。八月後半に向けて準備する。

八月十日

夜半から熊本は線状降水帯による大雨。眠れずに妻と夜中にニュースを見ていたら、お隣さんが「齊藤さんの車が沈みかけてますよ」と教えてくれる。うちのあたりは大丈夫だろうとたかをくくっていたのだが、外を見たら家の前がすでに川のようになっていた。

妻は長靴、僕はサンダルで外に出たが、水位は妻の長靴をすでに越えている。ゆっくり歩いて駐車場に向かったが、マフラーに水がかかっており、車の移動はあきらめるしかなかった。翌朝にはシートの座る部分の半分くらいの高さまで泥の跡がついていた。近所では子どもの友達の家が床上浸水になったらしくかなり被害が出た模様。

八代方面にも翌朝くらいから雨が移動し、会社は休業。うちの会社は無事ではあったが、各地でかなりの被害が出ている模様。翌日の出勤中には路上に放置された水没車をいくつも目撃した。高速道路が通行止めとなっており、一般道は大渋滞。熊本駅までの配達に3時間もかかった。復旧作業のことを考えると頭が重い。

JAFに電話すると「絶対にエンジンはかけないで」とのこと。いつも点検などに出している車屋は盆明けまで閉まっており、とりあえず窓を開けて車内の湿気対策。車検を終えたばかりだったのに、悲しい気持ちになる。

翌週、ようやく車屋と連絡が取れたのでJAFに再び連絡。午後に回収に来てくれるとのこと。電気系統がやられている可能性が高く、修理も難しいだろうとのことだった。車屋に運んでもらいい、営業の担当者と打ち合わせ。おそらく買い替えが必要だろうとの判断。

翌日、保険屋から「全損」との連絡が入り、あきらめて新

しい車を選ぶことにした。

八月二十三日

毎年夏に恒例の神戸ヘラブラウンジにてライブ。客足がやや寂しい。ピークを過ぎたのかもしれないと思うが、それもまた時の流れ。演奏自体は良かった気がする。

ヘラブラウンジは20周年とのこと。熊本のナバロも同じく20周年だそう。どちらのライブハウスにも、これまでたくさんお世話になってきた。ご恩に報いていかねばならない。

論語について(4)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、君子、不重則不威、学則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改。

(学而篇第一・第八章)

子〔し〕曰〔い〕はく、君子、重からざれば則〔すなは〕ち威あらず。学べば則〔すなは〕ち固ならず。忠信を主とし、己〔おの〕れに如〔し〕かざる者を友とすること無かれ。過〔あやま〕てば則〔すなは〕ち改〔あらた〕むるに憚〔はばか〕ること勿〔な〕かれ。

「君子は、理想とすべき人格者の意味。学而篇には、本章を含めて「君子」の語が計三回登場するが、いずれもこの意味である。孔子は弟子たちに「君子の儒と為〔な〕れ、小人の儒と為〔な〕ること母〔な〕かれ」(雍也篇)と論したが、「君子」とは一体どのような人か、本章はその一端を示したと言え

よう。なお、「重」は重々しくふるまうこと、「威」は威厳のある様子、「学」は古来の文物について学ぶこと、「固」は頑なな態度を意味しよう。また、「主」は、「君子は本〔もと〕を務む」(学而篇)の「本を務む」と同じで、「忠信」(従順と誠実の徳目)を学の根幹に据えて自らの任務とすることを意味しよう。

ところで、本章については、伊藤仁斎が『論語古義』で興味深いことを述べている。「此〔こ〕の章は一句各々は〔こ〕れ一事、皆な切要の言なり。凡〔およ〕そ『論語』の諸章は、直〔ただ〕ちに一時の言を記せる者有り、異日の語を併録せる者有り、数言を綴輯して以〔もつ〕て一章と為〔な〕せる者有り。此の章のごときは是〔こ〕れなり。蓋〔けだ〕し孔門の諸子、夫子平生の言を綴輯し、以〔もつ〕て一章と作〔な〕して、自〔みづか〕ら之〔こ〕れを相伝授せしなり。後の学者、亦〔ま〕た当〔まさ〕に自〔みづか〕ら佩服すべし」と。ポイントは、本章全体を「数言を綴輯して以〔もつ〕て一章と為〔な〕せる者」だという所にある。どういふことだろうか、ここで改めて考えたい。

仁斎は「数言を綴輯し」と述べるが、そもそも本章はいくつの言葉を綴り集めたものなのか。これに関連して、荻生徂徠は『論語徴』の中で次のように説いている。「此〔こ〕の章、「君子、重からざれば則〔すなは〕ち威あらず、学べば則

「すなはち固ならず」は是「これ一類なり、「忠信を主とし」以下は是「これ一類なり。孔子は多く古言を誦して以「もつて門人に誨（おし）ふ。或ひは並びに引きて以「もつて相発し、或ひは専ら誦して以「もつて独り行なふ。此「この章の半ばは它篇に見ゆ。而「しか」うして朱子は以「もつて其「その半ばを逸すと為「なし、仁齋先生は其「その類せざるを疑ひ、以「もつて一時の言に非「あら」ずと為「な」すは、皆な孔子の古言を誦するを知らざるが故「ゆゑ」なり」と。

例によつて徂徠は仁齋を批判するが、「君子、重からざるば則「すなはち威あらず。学べば則「すなはち固ならず」を一類、「忠信を主とし」以下を一類とするのは、本章が二つの言葉から出来ていることを述べたのである。ただ、その理由を徂徠は孔子の「古言」の引用に求めるが、これは『論語』の常套手段である。本章が二つの言葉に分かれることは、何も「古言」を持ち出さずとも、徂徠が「こゝで「此「この章の半ばは它篇に見ゆ」と説くように、子罕篇に「子曰はく、忠信を主とし、己「おのれに如「し」かざる者を友とすること無かれ。過「あやま」てば則「すなはち改「あらた」むるに憚「はばか」ること勿「な」かれ」とあるのを見れば、自ずと首肯されることだろう。

仁齋の「数言」も、この二つとして正解だろうか。が、私は

別の意見を持っている。それは学而篇第一章について論じたことと関連している。学而篇第一章は「子曰、学而時習之、不亦説乎、有朋自遠方来、不亦楽乎、人不知而不愠、不亦君子乎」とあり、全体を三つに分けられる。が、これは本来別々の言葉が「不亦く乎」という句の形が同じであることにより一つの章にまとめられたと考えられる。本章の場合も同じように考えることはできないだろうか。

思うに、本章前半部の「不重則不威」と「学則不固」とは、いずれも「く則不く」という形をとっていると言える。また、後半部の「主忠信、無友不如己者」と「過則勿憚改」についても、いずれも「無（勿）く」という禁止の句法が用いられ、同じ形をとっていると言える。このことから、本章前半部の「不重則不威」と「学則不固」は本来別々の言葉であり、同様に、後半部の「主忠信、無友不如己者」と「過則勿憚改」もまた、別々の言葉だった可能性があると考えられる。右の推論が正しければ、本章は少なくとも四つの言葉から出来ていると言える。では、何故それらが一章にまとめられたのか。その理由は、ただ本章の冒頭に見える「君子」の語にある、と言えるのではないかと思う。

終の作家

古賀 啓三

(米國ミシガン州在住)

この歳になると、あ、もうこれだけあれば、死ぬまでこれ
でいいよね、というのが増えてくる。

僕はクラシック音楽が特に好き、というわけではなく、造
詣が深い、なんてあるわけないのだが、このところピアノ・ソ
ナタをよく聴く。そこら辺の事情を今書いている小説で触
れている(これは作中人物の画家兼評論家六十七歳の描写
の一部だが、ピアノ・ソナタを聴く理由に関してはなぜか他
人とは思えないくらい僕と似ているので抜粋する)。「スコッ
チやら氷やらを載せた盆を書物机の上に置き、アップル・
ミュージックのライブラリに入れてあるベートーベンのピア
ノ・ソナタ集をかける。サブスク、という音楽の聴き方をクラ
シック好きの若い友人に教えてもらい、お薦めのアルバムを
ライブラリに入れてあるのだが、これも彼女に教えてもらっ
たグレン・グールドというピアニストの弾くソナタ集をかけ
ることが多い。天井が高いのでポリウムが低くても深い音

に聞こえる。特にクラシックが好きということではなく、若
いころはやかましいロックばかり聴いていたが、絵を描いた
り文章を書いたりするとき、一番邪魔にならない音楽、とい
うことでクラシック、それもピアノ・ソナタに行き着いた、と
いえば尤もらしいが、要は衰えただけである。年齢による衰
えは五感全てに於いて過剰な刺激を嫌う。老衰、とはこのこ
とだ(このあと、「しかし、唯一枯淡に身を委ねることを拒む
のは女の好みである」と続くのだが、それはまあいい)。

作曲家もベートーベンがあれば、まあ、もうあまり他にな
くてもいいんじゃないかね、とか感じているのだが、楽聖は三十二
曲のピアノ・ソナタを書いていて、グレン・グールドのソナタ
集には、そのうち二十曲が収めてあり、これでほぼほとんど
の気分とか、虫の居所をカバーしてくれる。

四月に亡くなったバルガス・リヨサは、ウイキペディアのり
ストによると、一九五九年『子犬たち』で、デビュー以降、二
〇三年の『Le Dedicó Mi Silencia』(本邦未訳だが直
訳すれば『私の沈黙を捧げる』か)までに二十一の作品(小
説)を書いている。この直近の作品について、リヨサは、文学
はこれで終わりだと思ふ、と書いている。「私は八十七歳で
す。樂觀的ではありませんが、次の本を書くまで生きられな
いと思っています。新作を書くのには三、四年かかるからで
す」という本人による予測は残念ながら正しかった。デ

ビュースから絶筆までの六十四年間で二十一作、というのは、多いのか少ないのか。リヨサの著作の長大さ、完成度の高さを鑑みると二つの作品に三、四年という執筆所要期間は、まあ、最低そのくらいはかかるよな、と極めて妥当な感じがする。であれば、その中で、そんなものか。この二十一作の中で、最高傑作は何か、という論争のようなものがあり、『緑の家』、『世界終末戦争』を支持する人が趨勢であるところ、大江健三郎が選んだのは『ラ・カテドラルでの対話』。この三作のうち、『緑』は読んだ。その視点や時系列の奔放な切り替えが、ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』を思わせた、がこの手法は今読んで『カテドラル』に於いてもより過激に採用されている(模索していたことがすでにやられていた落胆と畏敬)。『カテドラル』はどうやら「父と子」の相克が重要なテーマの一つらしく、知的障害を持つ子息の誕生以降は私小説家と化した大江にとって、その関係は「相剋」ではないにしろ、あまり明朗ではない「父と子」の絆、というのが「刺さった」のかしら。僕もこのリヨサ最高作論争に加わりたいたのだが、『カテドラル』は読みかけ、『戦争』は表紙を開いてすらいない。なにしろ三年も四年もかけて書くもんだから、長い。ゆえに、お亡くなりになるまで、一人の作家の著作しか選べません、ということであれば、リヨサの二十一の物語で十分です、ということをお願いしたかったです。リヨサ本人は『カ

テドラル』の前書きで、この作品ほど難儀したことはない。それゆえ、これまでで書いたすべての作品の中から一冊だけ、火事場から救い出せるとしたら、私はこの作品を救い出すだろう」と書いているのだが。

一つの作品を三年とか四年とか書き続けるのは実は大変なこと、根気を要する、因果で根暗な仕事だと思ふ。唯一の救いは、小説を書く、というのが、この世で一番楽しい作業ということである。村上春樹の、早朝、執筆を始める際、さあ、この物語は、今日は自分をどこに連れていってくれるんだろう、という、気分の高揚について書いた文章が、この「楽しさ」をいい尽くしている。厳密にいうと、この楽しさには、作品の進捗度による濃淡がある。今書いている作品は、完成に向けて、おそらく七割ほどの到達点にある。僕の場合、この程度書き進まない、と、没頭する、我を忘れる、ゾーンに入る、といった状態にはなかなか至らない。一つの作品に三年も四年もかけたことはまだないが、この『こんのさちおはるか』という作品はもう一年以上書き続けている。

夏二題

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

I 昭和三十年の夏

三島由紀夫の「小説家の休暇」は、昭和三十年六月から八月までの日記、という体裁の作品である。演出たつぷりの「読ませる日記」で、唯一正直な所は天候と気温の部分。

連日、三十度超で、「酷暑」「酷暑」という記述が続くのが、いさゝか意外である。

不思議に思つて、気象データを調べてみると、なるほど、同年七月の東京の最高気温は三十四・七度。三十度超の日は二十八日に及ぶ。現在より二〜三度低い印象ではあるものの、お世辞にも涼しかったとは言えないようだ。

ちなみに、同年同月の鳥取は、というと、最高気温三十四・八度。三十度超は二十三日。

四十年代に宿題で、毎日天気と気温を記録していた筆者

の臆気な記憶で書くのだが、三十度を超える日など、ひと夏に数えるほどしかなかったように思う。念の為、調べてみる。昭和四十四年の八月の最高気温は三三・六度。三十度超は二十四日である。記憶とは、まことに当てにならない。

弁解のため書いておくならば、当時筆者が住んでいたのは県中部の内陸で、沿岸部の鳥取や米子とは天気も気温も微妙に異なる。しかも、住まいが山のふもとの高台で、前には畑が広がるロケーション。かてて加えて、小学生のことだから、計測するのは勉強時間の午前十時までの筈。片や気温が最も高くなるのが、午後二時頃であるならば、記録が二十度台になるのも宜なる哉、ではある。

II 夏の花

日の出と共に三十度という毎日だから、お散歩プロジェクトは無期限運行見合わせ中だが、よんどころない事情で日中に外出する際、道々目にするのが百日紅(さるすべり)である。花が咲いてるなあ、と思つて見ると先ず百日紅。

そのまま床柱になりそうなツルツルの木肌が一番の特徴

で、繁った枝の先に花がまとまって咲くのだが、名前のとおり花期が長い。樹高も塀の上から顔を出している程度なのから、三階建てのビルに達するようなものまで、伸縮自在である。

ひとつの樹に目が留まると、不思議なもので、ここにもあそこにも、と其処彼処に出現する。殊の外、庭木にしているお宅は多い。まあ、真夏に花を付ける樹木は余りないから、勢い、そのような選択になるのかもしれない。赤、緋色あたりが最も多いようで、次いで桃色、薄紅、白、稀には藤色(薄紫)も見かける。私見では薄紅色が最も品があるように思う。

炎天の 地上花あり 百日紅

虚子の句だが、彼の書いた「百日紅」という写生文が面白い。曰く、百日紅は冬から、夏の初めにかけては枯木のままで、他の樹木が繁りに繁った後、漸く若葉を出す。そして赤い花を咲かせるのは夏の盛りも過ぎてからで、ほぼ秋の花だと書いている(旧暦であることに注意されたい)。にも拘わらず、句作の際は、初見の印象から、どうしても如上のような真夏の句になってしまう。と。後鳥羽院の「嵐も白き」と同

じ趣向ということなのだろう。

漱石の『吾輩は猫である』では、苦沙弥の友人・迷亭先生が、百日紅の花が散るまでに著作をものする、と宣言し、できなかつたら、西洋料理を奢る、という賭けをする。結局、花が散っても書けず、あまつさえ、詭弁を弄して、賭けも有耶無耶にしてしまうのだが、百日紅ならではのエピソードと言えよう。

横溝正史に「百日紅の下にて」という短篇がある。敗戦の翌年の夏の話である。空襲で焼失した家屋敷の跡地に、ただ一本焼け残った百日紅の花の下、二人の男が過去の犯罪について語る、というもの。花は、一点景として描かれているのだが、陽に炙られた廃墟と真つ赤な百日紅の花の対比が鮮烈で、「朱夏」「敗戦」「焦土」の情景がありありと浮かんでくる。

残(のこん)の暑と幾日ぞ、又幾日ぞ。(鏡花)

旅立つ前の「宿題」

三浦 永理

(三十歳・女性)

さて、イギリス留学を九月に控え、八月は実家のある東京で過ごしている。鳥取に仕事を見つけて以来、帰鳥しない前提で実家にいるのは初めてなので、不思議な感覚だ。

もう帰っても、私のページのアルトは空港にとまっていないうし、国府にあったアパートの部屋もない。たしかにあったものは、全て引き払ってしまった。

留学に行くとなると、準備も色々と重なる。通常の引越しの手続きに加えて、ビザの申請、入学前手続き、持っていく荷物の整理などなど、やることは山積みだ。

私の場合、この期間に無理やり押し込んでしまおうと、英語の指導資格をとり始めたことで、自分の首を絞めてしまった。この資格は CELTA というもので、ケンブリッジが認める英語の指導資格だ。世界的には、これをとっておかないと、英語指導のポストが開かれない「免許証」のようなものらしい。教員になる以前から興味があったものの、日本国内であれば、神戸で四週間かけて取る必要があり、鳥取に引越してきてしまった私には縁遠い資格だと思っていた。

それがなんと七月から八月のお盆までは月水の夜に四時間ほどオンライン、お盆明けの二週間に対面型で講義とトレーニングが実施されるというものだから、これはチャンス、と飛びついた。飛びついたが最後、資格と引越しとに追われ、ばたついた気持ちのまま鳥取を旅立った。(ちなみに、鳥取最後の夜、パソコンの画面が故障。東京に着いて最初に向かったのは、Apple 新宿店だった。)

この資格を取るには、全て英語の研修を受けねばならず、四つのレポート課題、八つの授業実習が求められる。この授業もただやればいいわけではなく、英語での授業案作成が求められる、事前提出の宿題となっていた。研修の内容は、英語を英語で教えるテクニックの基本的な部分を丁寧に習っていく内容だ。大人の「まだこれもチェックしていないの?」とトレーナーに(英語で)詰められたりする。大変である。

そのうえ、前半のオンラインのときには Zoom での授業が求められる、普段対面型授業の環境に慣れている受講者の多くが苦戦した。そして、先週、後半の対面の期間を迎え、授業も普段の授業と近い環境になった。やはり、対面の方が生徒の空気がわかる。実際の作業の様子を横で見ることができるので、困っている部分にも気づきやすい。

個人的には、私の教員としてのキャリアがコロナと共に始

まってしまったのもあって、Zoomで教えることは慣れているつもりだった。それでも、あの頃、やりづらさを感じていたことを思い出した。たとえば、勤務校では、五十分間オンライン授業をするのではなく、時間を短縮したり、どうしても対面でしかできない実技の授業は登校日に行ったりしていた。

この CELTA の濃密な内容のおかげで、鳥取での日々は遠く感じられる。課題があまりに忙しいせいで、お盆中もDのを手放せなかった。それでも、学校が始まって鳥取に帰らないことに気づいて、私は本当に旅立ったのだと実感している。さつとなく、寂しい。

CELTAの課題がやっとひと段落しようというところで、下北沢に出かけた。本屋 R&B さんに私の新刊『思わず、涙さん』とつとりからの返信を置かせていただくからだ。ここには、本の読める店 FUNKO がある。一人で出かけているからこそいけるお店だ。なぜなら、おしゃべりもなしで本を読むだけに集中するカフェだからだ。そこで、やっと私は自分の研究に関連がありそうだと思っていた関連書籍を読む出す。

本当は、この春からはずっとそういった類の本を読む覚悟だったけれど、「せつかく最後だから」といふところに出かけてしまったのが良くなかった。でも、後悔はしていない。

大切な人たちと一緒に、直接過ごせる時間は限られていたのだから。

『思わず、涙さん』という本の制作を急いだのは、一月に本を出したときには「イギリスに行って、その後も研究を続けるので、鳥取を出不ます」という大事なことを隠していたから。そして、もうひとつは、思ったよりも一冊目に入れ込めなかったテーマがあったから。それを形にしたいという気持ちがあったので、引越しの脇で作業していた。

結局、制作にずるずると時間がかかり、費用もかさんでしまった。ひとまず、八月頭、私の SHEEPSHEEP BOOKS さんでの壮行会には間に合った。知り合いを中心に直接話せる機会を持てた。こんな私のために、ありがたい会だった。

そして、月末の八月二十九日には、イギリス大使館で壮行会が行われる。チーヴニング奨学生として招待されたのだ。壮行会に始まり、壮行会に終わる八月だった。

なんだかみんなが遠く感じられる。一緒にいられないことが、同じ空間にいないことが、寂しいということを、私はどこかで忘れていたようだ。あの数年で身に染みていたはずなのに。

この距離を埋めるだけの深い愛と感謝を、あなたに。

夏のいきものがかり エビ編

あきの素生

(くうねるめがね)



「めだかのタンクメイト」、ミナミヌマエビのお世話をしている。

ミナミヌマエビは繊細で、導入後なかなか定着しなかったり、卵を抱えても孵化に至らなかつたりして、飼育がうまくいかない。粗忽な自分の手には負えないのではないかと、思い、ミナミヌマエビを新たに飼いはじめることには後ろ向きだった。でも、気づけば「どうやったらミナミヌマエビに負担をかけることなくわが家に迎えられるか」を考えている自分がいた。大分逡巡したが、七月、これならば、と思える方法で、ミナミヌマエビをお迎えすることにした。

といっても、何も大げさなことではなく、エビとお店の水をそのまま水槽に入れて飼う、というごくシンプルな方法をとった。ミナミヌマエビは水質の変化に敏感で、すでにある水槽に導入する際は、少しずつ水槽の水温や水質に

慣らしていく必要があるため、慎重に「水合わせ」を行う。水槽にエビとお店の水が入ったビニール袋を浮かべて水温を合わせ、その後、少しずつ水槽の水をビニール袋に入れて、水質を合わせていく。「点滴法」なるものもあるくらいで、本当に慎重に、少しずつ少しずつ水槽の水に慣らしていくことが推奨されている。めだかやタニシを導入するときにも行うが、エビと比べればお気楽なものだ。病原菌等の混入を防ぐため、お店の水を水槽に入れることは極力避けるのがセオリーのようなだが、今回はエビ専用の水槽を新たに作り、他の生体に影響がないので、最初はお店の水のみで飼育することにした。水質の変化に対するストレスを最小限にする作戦だ。もはや「めだかのタンクメイト」ではない。「元タンクメイト」で、水槽の主である。

お店の水をそのまま使う作戦は功を奏し、買って来たエビは元気に定着してくれた。導入直後は、蒸発して減った分だけ、おそろおそろカルキを抜いた水道水を足していったが、エビは意に介さないようだった。これに気をよくし、めだかの水鉢から苔が付いてしまった水草を取り出し、エビの水槽にほいに入れてみた。そもそも、めだかの水鉢の苔を食べてもらうため、タンクメイトとしてミナミヌマエビを飼いはじめたのだ。苔は好物のはずである。翌日、水

槽を覗いてみると、水草に付いていた苔が目に見えて少なくなり、萌えるような緑色を取り戻していた。エビは小さな手(足?)を休みなく動かして、苔を食べていく。十二分に苔が取り除かれてから、その水草を元のめだか鉢に戻し、他の水草と入れ替えた。さながらクリーニンング工場だ。水槽に苔が入ってくると、食欲旺盛なエビは我先にと飛びついてくる。自分の手からえさを食べてくれているようで、かわいさが増す。水にも拒絶反応は見られず、少量ずつではあるが、水換えも行うようになった。

そうこうしているうちに、エビが抱卵した。見つけたときはうれしかったが、その反面、孵化までたどり着かなかった過去の経験から少し警戒した。ミナミヌマエビは、卵をどこかに産み付けたりせず、お腹に抱えたまま育て、孵化するタイミングでお腹から離す。身の危険を感じると、脱皮をして卵を落とすこともあるというので、水を水槽に入れることには再び慎重になった。

母エビはたぐさんの小さい卵を抱え、重たそうなお腹でのそのそと動く。でも、えさが入ってくると、足を目いっぱい動かして水中を駆け上がり、えさにしがみつく。時折後ろの方の足をぱたぱたと動かして、お腹の卵に新鮮な水を送っている。物陰に隠れていることも多いので、母

エビの姿を見かけると安心し、時間を忘れて眺めた。黒かった卵は、だんだんとその色を薄くして、順調に育っているようだった。

母エビを見守り続けて三週間程度経った頃だろうか、ごま粒ほどに小さく、透きとおった何かが水槽に張り付いていた。あまりに小さく、じつとしてるので、エビなのか、そもそもいきものなのか、すぐに判断することはできなかったが、母エビのお腹の卵が消えていたことで、これが待ち焦がれていた稚エビなのだと確信した。よく見ると、一匹だけではなく、数匹同じように水槽に張り付いている。横からのぞくと、小さいながらも立派にエビの姿をしているのがわかる。母エビにお疲れさまの気持ちを含めてえさをあげると、少し身軽になったからで飛びついた。

母エビはつい先日三度目の抱卵を果たした。最初に生まれた稚エビたちも順調に育っている。大きくなったら、数匹めだかの水鉢に移住させ、タンクメイトとして活躍してもらいたい。いきものがかりの楽しみは尽きない。

なぜ読書に「ともだち」が必要なのか

奈良 敏行（笈の定有）

定有堂でのわたしの読書には、二つの姿勢があった。本を読む人たちの読書体験に寄り添うものと、もう一つは自分の読書を深める手がかかりとして、他者を必要とすることだった。

定有堂教室では、「心理学で、もうおともだち」とか「人文書でおともだち」などの旗印を掲げてきた。前者は心理学の先生を囲んでのお話し会。二十代半ばの人たちが中心だったので、「アイデンティティ・クライシス」（エリクソン）を課題とした。青年期について一緒に考えようというテーマだ。地方で暮らすための自分を、しっかり確立しようという意図があった。その意図は、そのように考えている人たちが数人かたまり合えば、それだけで果たされるように思えた。間に書物も存在するが、それはそれほど重要ではなかった。講師の先生の提案で「持ち寄り夕食会」なども盛会だった。

心理学といいながら講師（鳥取大学教授）の専攻が認知心理学だったので、錯視や錯誤などゲーム感覚で楽しめるものでもあった。本が好き、本屋が好き、という人たちだけの手にした、もう本はどうでもいいという緩い集りだった。講師

が鳥取を去るまで十年近く続いた。

重なるように途中から始まっていたのが、定有堂教室「読む会」だった。これは人文書を中心とした読書会だった。毎月一冊、哲学、仏教、文化人類学、社会思想など時代と足並みを揃えたものだった。講師の専門が日本史、興味分野が現代思想だった。歴史は資料を発掘するに尽きる。その資料を活かすには思想が必要と、いう方法論が自覚されていた。

講師は日々見つける刺激的な本を紹介するのが楽しく、独演会的なところもあった。だから参加者はきちんと課題本を読んで来なくても、なんの不自由もなかった。それでも参加者のほとんどが読書家で、そこには本を読む人たちの饗宴があった。

わたしは本が読まれているこの風景には至上の喜びを感じたが、自分が本を読むということ自体には興味がなかった。これは不思議なことだが、そんな本屋だったとしか言いようがない。本を読む、書く、売る、という流れの中には断絶があった。わたしは本を売ることだけが楽しかった。それに加えて本を読む人たちの集まる場をつくり出すことが同様に楽しかった。本が好きな人たちが集まり、その片隅に無言で居つづける時間が幸せだった。

本屋の中に「ともだち」が必要だったのだが、その輪の中にいるよりも、周縁にいるの方が好きだった。座敷わらしみた

いだと言われたのもこの頃だ。本屋の仕事と読書の耽溺は両立しないと感じていたのだ。とくにそこに覚悟とか決意というものがあつたわけではないが、当然そんなものだと思います。読んでいた。二十代の終わりの頃に、読書の方へ向かうことは、自分を幸せにしないと気づいていたのかもしれない。本を読んで矛盾の中に生きるのに疲れていたのだろう。いずれにしろ、三十歳に近づいた私は、幸せになりたいと、考えを変え始めていたのだ。

本を読んでも幸せにはなれない。でも本を売るということの先には、幸せが待ち受けている。これは正しい考えに思えた。

本屋を始めて三十五年くらい立った頃、「本屋が読書に追い越されていく」という言葉にとらわれるようになった。読書会は少人数で読み合い、課題本は意識の高いものだった。その密度の高い読書は読書会だけで十分で、店頭はまた別物だと久しく考え続けていた。ところがなぜかある日、店頭を濃度の深いものにしようと思ひ立ったのだ。時間の流れが変わったのかもしれない。「縮減」という言葉が脳裏に浮かんだ。狭くすることの始まりだった。

寺山修司の『書を捨てよ、町へ出よう』は、荒野へ誘う書物だった。そこには「何一つ自分の青年時代に賭けるべきものを持たなかった者たち」を告発する言葉があつた。賭けに

負けたから本屋を始めたのだろうか。解き明かすことの難しい心の動きだと思ふ。しかし、そういう、書を捨てて本屋を始める、という気概の本屋だったのは間違いない。

しかし「本屋が読書に追い越される」という心の脈動は、読書は賭けるべき何ものかだという心の折り返しでもあつた。だんだん自分の最新の読書が棚に反映されていくようになった。読書の脈動の中に入る。そのためには別の意味で「ともだち」が必要だった。店頭で人と出会い、本好きの人たちがとりつかれている本を教わる。多くの場合それは移動するひとたち（旅の人）だった。一期一会で人に寄り添う。そしてメモしながら会話する。いつも定有堂に顔を出す同好の本読みの人に、教わったばかりの自分で読み込んだ内容を伝える。その人も興味を示し、帰路のJRの中から感想をまとめメールしてくる。自分できちんと読むのだが、読んだだけでは伝えられない。だから語れるようにノートにメモをとり、そのメモを見せながら会話するのだった。そういうことも大切なもう一つの「ともだち」だった。

読書になぜ「ともだち」がいるのだろう。本を読む人たちの側に黙している幸せと、そういう集いと離れ、一対一で情報を交換する「ともだち」を不可欠とする、そこから始める幸せがそこにあつたからだろう。

そうして本屋が読書に追い越されて行った。2025.0716

案内



ドラメリア (座敷わらし)

◇ 定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん(県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア(市役所二階) 水曜夜・土曜昼

・定有堂教室と太極拳の詳細は
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー・森の生活者

・邯鄲堂・上田ビル(ボルゾイレコード)・食堂カルマ

・SHEEPSHEEP BOOKS(定有堂ビル2階)・エスキース(倉吉)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部

・編集後記:

発行人の著書二冊が、県立図書館の電子書籍に入りました。これで、いつでも、どこからでも(たとえば海の向こうからでも)、ネット環境とカードがあれば読むことができます。中身の検索ができるのが便利で◎。

ドラメリア(編集長)

八月十八日(月)の鳥取県図書館大会、会場参加、オンライン参加の皆さま、大変ありがとうございました。「読書」について考える大切な機会をいただきました。定有堂教室からも太極拳葉香クラブからもご参加いただき、心強いものがありました。定有堂教室「読む会」のスピリットは『伝えたいこと』が語る、「大きな声を信じるな、本を読め、自分の頭で考えろ」だったということであらためて思い起こしました。そして読書のトライアングル「読む、語る、書く」が現在進行形かと思えました。

奈良敏行(発行人)

